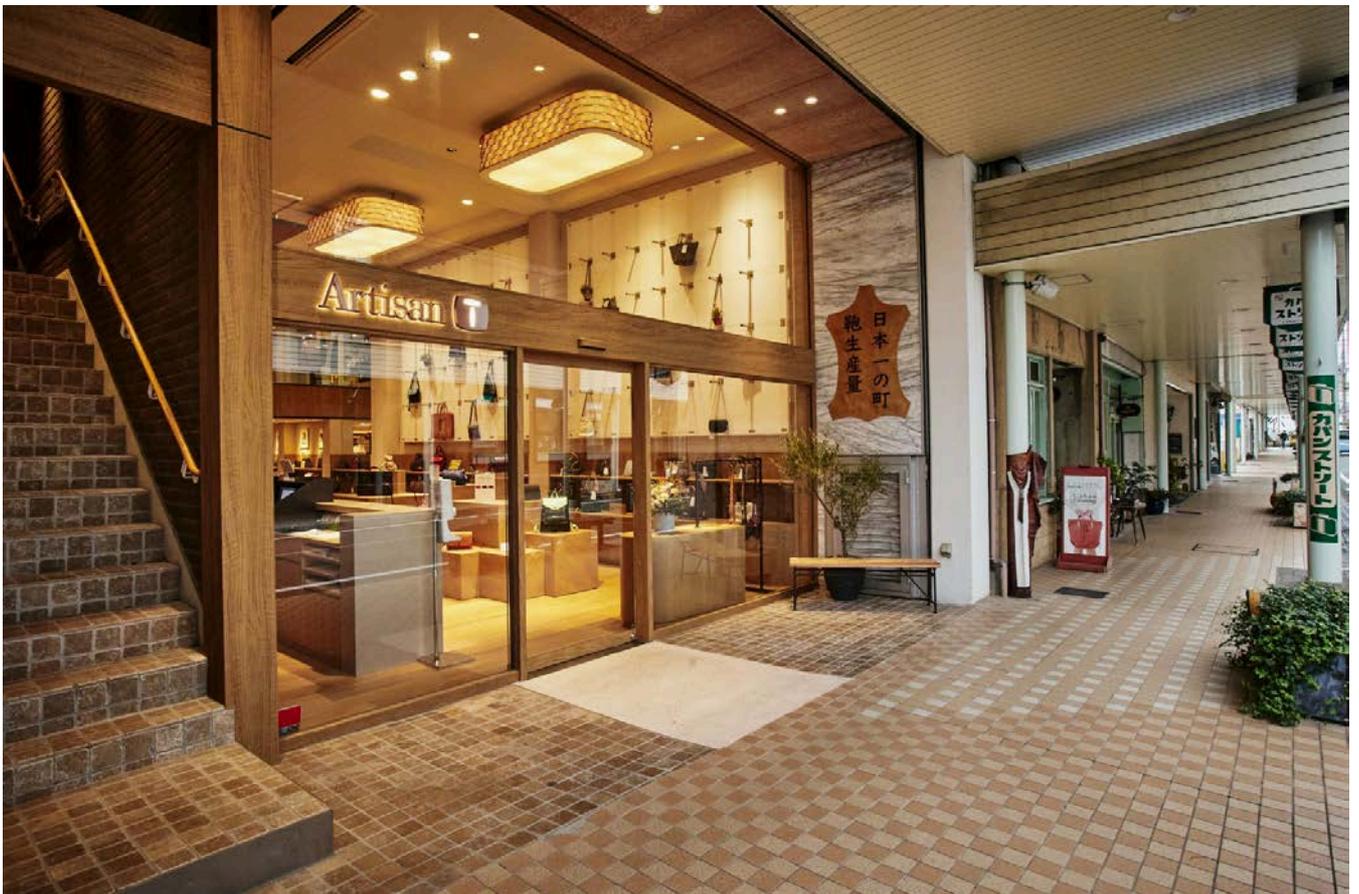


Artisan

鞆に特化した拠点施設
Toyooka KABAN Artisan Avenue
トヨオカ カバン アルチザンアベニュー



Official Web Site

Artisan Avenue (1F Artisan Atelier)

当施設も軒を連ねるカバンストリート（2005年発足）には10店舗以上の鞆店が軒を連ねます。その中でここアルチザンアベニューは豊岡市の地場産業でもある鞆に特化した拠点施設です。



2014年4月19日OPEN



施設内観（設立時）



施設外観（現在）

豊岡の鞆産業はOEM（Original Equipment Manufacturing）いわゆる製造業者が他社ブランドの製品を製造するというものが主体で小売店がありませんでした。

そこで販売と、観光と、地域を守るために
豊岡まちづくり株式会社、豊岡市、鞆の製造企業からなる鞆工業組合の出資で
このArtisan Avenueが設立されました。

元レコード店だった店舗を改装し、2014年にオープン。

1Fショップ、2Fワークショップスペース、3Fスクールと
建物全体を総称してアルチザンアベニューとなります。

1Fショップには20社以上・約250アイテムが並び、
豊岡の鞆技術の粋を感じていただけます。



2022年11月リニューアル

Artisan



Artisan（アルチザン）とは

「職人」という意味のフランス語です。

Artisan（職人）のAvenue（大通り）をイメージし、
1Fから3Fまでの吹き抜けの構造によって
職人の街の景色や音を体感することができます。



設計のポイントとして、起源である柳行李の
編み込みのディテールや素材感、
天井の低さを感じさせない照明設計等で
コンセプトを表現しています。
天上の照明や階段など、
随所に柳行李のイメージが施されています。



Artisan Avenue (3F Artisan School)

ラフスケッチから一人でカバンが作れる職人の育成を目指す 産地ならではの職人養成スクール

Toyooka Kaban Artisan School(トヨオカカバンアルチザンスクール)は、豊岡市や兵庫県鞆工業組合の協力の下、豊岡まちづくり株式会社が運営する鞆のエキスパートを養成する専門校です。(設立 2014年4月)

全国の産地の各エリアで、職人が高齢化を迎え、今後生産が出来なくなるのが危惧され、鞆づくりを教えて職人を育てる”かばんの学校”の設立が不可欠であるということで設立。



兵庫県豊岡市は、新羅王子とされる天日槍命(アメノヒボコ)によって、柳(ヤナギ)細工の技術が伝えられ、その柳細工で作られたカゴが豊岡の鞆産業のルーツだと言われています。現在では市内に多数の鞆関連の企業が存在する国内最大の鞆の生産地です。

その産地で、1枚のラフスケッチから一人で1本の鞆を製造できる職人を養成します。一般の専門学校では、作品のテーマ毎に教材費を徴収していますが、当スクールでは、生産地ならではの取組みとして、一切教材費を徴収していません。



必要な工具も1年間貸与しますので、教室の中では授業料以外の費用は発生しません。

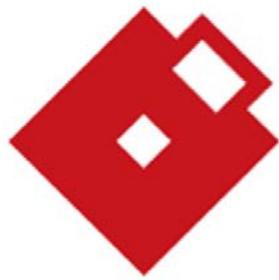
また、普段頻繁に使用する「平ミシン」を生徒の人数分設置していますので、1台のミシンを1年間占有して使用できるため、他の生徒が使用している間待つ必要もありません。

プロレベルの内容を教えている学校であり、定員13名に対し3名の講師が常駐しています。

メイン講師はこの道50年のベテラン。国内大手鞆メーカー勤務し、かつ中国での工場建設や技術指導の経験のあるスペシャリスト、竹下嘉壽先生が担当。



生徒作品例



豊岡鞆®
TOYOOKA KABAN

豊岡で作られた鞆は豊岡製・豊岡産と呼ばれており
それら豊岡製・豊岡産の鞆の中でも、
兵庫県鞆工業組合が定めた基準をクリアした優れた製品を「豊岡鞆」と呼び
ブランドロゴを冠することが許されています。

豊岡鞆は

「豊岡で生まれ、ものづくりの長い歴史と職人の技術が生んだ優れた鞆を消費者に安心して使って頂く」
というコンセプトのもと「安心感と持つ喜びをお客様に提供する」ということを
哲学として掲げています。

2006年11月30日に兵庫県鞆工業組合の登録商標である「豊岡鞆」が
特許庁に地域団体商標(※)として認定される。

※地域ブランドとして用いられることが多い地域の名称及び商品（サービス）の
名称等からなる文字商標について、登録要件を緩和する制度

このいわゆる地域ブランドが設立された2006年頃から
各社がそれまで主体だったOEMの技術や得意分野を活かして
自社のオリジナル商品を数多く生み出している。



審査には専任の委員と各企業が立ち合い、製品の素材や強度、糸処理など様々な点を
細かく審査し、年4回ほどの審査の内、1/3程は落選するなど厳しい基準をもって行われている。

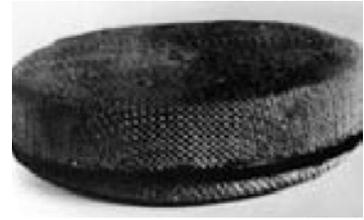
豊岡鞆には保証書が付いており、その品質を認定を受けた企業が責任を持って保証し、
交換や修理などを含めた最善の対応をお約束している。

豊岡鞆の歴史①

西暦27年～大正まで

(西暦) 27年

但馬を拓いたと言われる天日槍命(アメノヒボコノミコト)が柳編みの技術を伝える。



712年

「古事記」の中に新羅王子とされる天日槍命(アメノヒボコノミコト)によって柳細工の技術が伝えられたとの伝承が記されている。

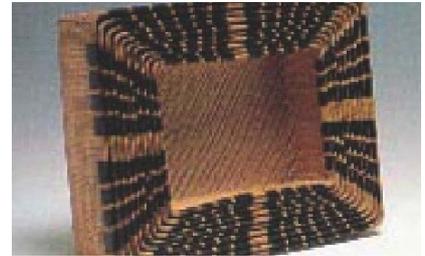
豊岡の鞆のルーツはその柳細工で作られた「カゴ」だと言われている。



1473年

奈良の正倉院に「柳篋(やなぎかご)」を上納
「応仁記」には、豊岡市の九日市に「九日市場」が開かれ柳こおりが商品として盛んに売買された記述がある。

おそらくこの時期から、地場産業として家内手工業的な杞柳産業が発展したと予想される。



1580年

羽柴秀吉の但馬平定により杞柳産業としての歩みが始まる

1668年

豊岡藩の独占取扱品として、柳こおりの生産が盛んになる。
この年、京極伊勢守高盛が丹後国から豊岡に移封され柳の栽培並びに製造販売に力を注ぎ土地の産業として奨励したのがはじまり。

豊岡から大阪を經由して全国にその経路が出来上がり幕末には流通・販売機構も整い、全国の名声を築く。



1881年

柳こおりから豊岡の鞆へ
豊岡の鞆としては八木長衛門が第2回内国勸業博覧会に2尺3寸(約70cm)入子3本革バンド締め「行李鞆」を創作したのが始まりと伝えられている。
この3本バンド絞めの柳行李は外側はトランクと同じだがトランクとは呼ばれずに柳行李と呼ばれていた。

このことは、これが従来の杞柳製品の改良品で柳行李で名高い豊岡で作られたことが鞆と呼ばれず行李と呼ばれた原因と言われている。



1893年

シカゴ万博博覧会で柳製品が「銀賞」を受賞

1900年

パリ大博覧会で柳製品が「銀賞」受賞

1925年

5月23日 北但大震災と世界恐慌により大打撃を受ける



豊岡鞆の歴史②

昭和～現在

1936年

素材がファイバーへ(紙を圧着したもの)

ベルリンオリンピックの選手団の鞆として豊岡のファイバー鞆が採用されるなど
この頃には「ファイバー鞆」が豊岡かばんの主流を占めるようになる。



しかし、1937年の日中戦争1941年に太平洋戦争と戦火が拡大するにつれて材料の確保が困難になり、
材料の購入・販売などの統制が行われた。

1953年

鞆産業が地場産業へ

従来のスーツケースの同枠を改良し、**外型崩れ防止にピアノ線を使用した鞆が誕生**。
軽くて強靱であることなど、これまでの欠陥を補っていたため他商品を圧倒した。



「岩戸景気」(1958～1961)を背景に**300を超える鞆関連企業が生まれ**、

全国生産の80%のシェアを占めるまでに発展。こうしてカバン産業が豊岡市の地場産業となった。

1971年

ニクソンショックを受けて輸出から内需型へと切り替える

2006年

兵庫県鞆工業組合の登録商標「**豊岡鞆**」が11月30日に特許庁に
地域団体商標として認定される。



豊岡鞆[®]
TOYOOKA KABAN



2008年

デザイナー森田理央とコラボした

「マリオネットジョンソン」シリーズを発売する。

かばんを核とするまちづくりへ

「豊岡鞆」ブランドをきっかけに、製造中心のかばん産業から
製造と地域を生かしたかばんの街へと変わる取り組みが動き出す。

2013年

鞆職人育成校である

「**Toyooka KABAN Artisan School**」が開校。

地域全体で従事者を増やす努力、技術力アップを図る。



MARIONETTE JOHNSSHON

2014年

豊岡鞆旗艦店である

「**Toyooka KABAN Artisan Atelier**」がオープン。

各メーカーが自社ブランドを展開し、

現在では20社以上の製品を取り扱う。



アルチザンスクールの様子



アルチザン施設外観

2018年

豊岡鞆の旗艦店である「**豊岡鞆KITTE丸の内店**」オープン

2020年

伊丹空港内に「**豊岡鞆伊丹空港ゲート店**」オープン



A&D27

職人が心をこめた美しい縫製と磨き上げた技術を駆使した高い品質と合理的かつ機能性をあわせ持つ優れたデザインの鞆を提案するプロジェクト「A&D27 (Artisan Delight)」

「自転車の旅」の提案や「下駄」からの着想など新しい発想のモノづくりに挑んだ。

【2014年】



BELCIENTO

国内生産のメンズ鞆の7割以上は豊岡製というデータから、さらなる技術の向上のため一部の企業が豊岡鞆レディースブランド「BELCIENTO (ベルチエント)」に参画。これを機にレディースバッグを始める企業も。

【2014年】



日本の伝統産業を掛け合わせた、新しいもの作り。

井原デニム×豊岡鞆

岡山県の「井原デニム」とのコラボ。豊岡鞆が日本の伝統産業を掛け合わせて新しいものづくりを目指す試みから井原デニム審議会へ打診したことから取り組みが始まる。

【2018年】



鯖江メガネ×豊岡鞆

福井県の「鯖江メガネ」とのコラボ。厳しい品質確認・管理により良質なメガネが生み出されているという点は「安心感と持つ喜び」をお客様に提供するという豊岡鞆とよく似ており、異業種産業の伝統と技術が生み出す斬新なものづくりが始まる。

【2019年】

Artisan × design project “SASUTICO”

既存のジャンルや概念にとらわれない「新しい鞆」や、産地・豊岡を象徴する「豊岡らしい鞆」をテーマに産地の作り手とデザイナーが協力して商品化を目指す企画を実施。自由な発想を重視するため、鞆の生産やデザインに携わる職業の方は除いた95名がエントリー。2度の審査を経て優秀賞「SASUTICO」を選考、Artisan School講師との連携により商品化した。

【2019年】

食の副産物から生まれるアップサイクルバッグ

豊岡鞆では、現在世界中で取り組まれているSDGs（持続可能な開発目標）の実現に向け、鞆作りで使う素材そのものを見直し、植物性の成分でつくった環境負荷の少ない革「レッザポタニカ®」を素材とした鞆を製作した。これまでに「レッザポタニカ ヴィーノ」ワインポマース（ワインの搾りかす）で鞆し・染色された革「レッザポタニカ お茶」緑茶飲料の製造過程で出る茶殻で鞆し・染色された革など、自然由来の素材を利用した優しい風合いが特徴のシリーズを展開。

【2022年】



漁網再生素材の鞆

【100年後も豊かな海と鞆に支えられた街であるために】
世界中で大きな問題となっている海洋プラスチックごみを減らし、未来に綺麗な海をつなぐ、資源循環の為の取り組みで気候変動への対応や海の豊かさを守ることを担う。つくる責任（製造業）と使う責任（漁業者・製造者・利用者）をより善く果たすために、鞆に関わる多くの人と協働で取り組むことが、未来の子供たちや社会への責務だと考えています。

※シリーズ製品の売上の一部を、一般社団法人 ALLIANCE FOR THE BLUE に寄付しています。

【2021年】



柳行李について

行李とは、柳や竹で編んだ箱形の入れ物のことです。
昔は主に旅行や引っ越しの時に、荷物を入れて運搬するのに用いられました。
今でも衣類の保管などに使われています。

柳行李の材料となるのは

コリヤナギ（＝ヤナギ科の落葉低木）です。

コリヤナギの樹皮をはいで樹液を水洗いで落とし、天日で乾燥させた
白柳（しろ）と呼ばれる柳を使って作られています。

柳行李は柳の持つ特性である

水に浸すと柔らかくなり曲げ易く、また乾けば堅くなる

という性質を利用して麻糸で編み上げられ、その後縁掛（ふちがけ）をして
角を布や皮などで補強して作られています。



柳行李の特徴

- ・ **丈夫で軽い**
落としても壊れにくく、旅行や引っ越しに重宝された。
- ・ **収納量を調節できる**
ふたのかぶせ方で収納量を増やすことができ、多量に収納できた。
- ・ **適度に水分を吸収、保持**
この性質をうまく利用したのが、ご飯やおにぎりを入れた飯行李。
ご飯の劣化を防いで美味しさを保ってくれ、水を汲むこともできる。
- ・ **衣類を守る**
湿気によるカビや柳の持つ成分により虫喰いから大切な衣類を守る。
- ・ **汚れたら洗える**
汚れたら洗うことができ、乾かして使える。



円山川の氾濫が多くあった豊岡では
米の収穫が不安定であったため、
気候風土が生育に適し河原に自生していた
コリヤナギを用いてかご作りを行っていた。

豊岡で杞柳製品づくりが広まった背景として

特有の自然環境も。

豊岡盆地は内陸でありながら海拔が低く、
中心部を蛇行する円山川が荒原（あわら）と呼ばれる湿地帯を数多く形成。
そこにコリヤナギが大量に自生したことに加えて、
但馬麻芋（あさお／麻やカラムシの茎の皮の繊維から作った緒）や縁竹といった
行李づくりに欠かせない原料がすべて身近に揃っていました。

もともと地形的に農地が限られ、
積雪する冬季は農閑期となることなども相まって、
副業として杞柳製品づくりが盛んになった。



コリヤナギ



道中記『但州湯嶋道中独案内』（江戸時代）

江戸時代には京極藩の保護・奨励により豊岡の柳行李は全国的に名を馳せました。
その後時代の変遷に合った柳細工やかばん産業として受け継がれ、
豊岡はかばんの町として知られるようになりました。

明治時代に移り、これまでの行李に牛革の取手と装飾を施した“**行李鞆**”が
明治33年（西暦1900年）パリ万博にて世界の人々を魅了した。

大正時代になり、杞柳細工の産業は、海外への輸出が行われるまでに発展した。
戦時中は主に軍用行李や飯行李が作られ、軍人達の飢えを凌いだといわれます。

昭和初期には杞柳産業に携わる職人が1万人程存在していたと言われていたが、
ファイバーや合成皮革といった素材の開発・普及により柳行李の需要は徐々に衰退。

平成、令和と歳月は流れ、
現在その伝統の技術技法を継ぐ柳行李の職人は
“たくみ工芸”を屋号に持つ伝統工芸士・寺内 卓己ただ一人となった。